

この領域は事務局使用
縦5行×横12文字

生活
可能性
食べる

徳島県 藍住町

利用者様の「持っている力」を信じて

～M様の底力～

いりょうほうじんりょううんかい おやのいえ
医療法人凌雲会 グループホーム親の家

ふくおかさちこ
計画作成担当者 福岡佐知子

稲次正敬
福富郁代 大塚左知子

平成17年12月1日開設
2ユニット定員18名

(親の家基本方針)
入居者は介護を受ける人ではなく生活の主役である。
入居者の心の動きに共感しありのままを受け止める。

(はじめに)
肺炎で入院されていたM様が、治療を終え当事業所グループホーム親の家(以下親の家)に帰って来られる事になった。しかし、その退院はターミナルを見据えてであった。「もう一度馴染みの場所で、母らしく生活をして欲しい。」家族の思いと共に帰って来られた。家族、私達職員は「M様はまだまだできるのではないかと」可能性を信じ、親の家で馴染みの人達に囲まれた生活の中でM様らしく生きる為に行った支援とその結果を報告する。

(利用者紹介)
M様 女性 87歳 要介護5
親の家入居中、肺炎と診断され入院される。退院を控え、医師より口から食べる事は誤嚥をおこし死に至る可能性がある為 PEG(胃ろう)を勧められる。たとえPEGをしたとしても医学的管理が必要であり親の家での生活は難しいとの説明であった。戸惑い悩まれた家族は、PEGは希望されず、そして最期の場所として生活の場である親の家に帰る事を決断される。協力病院医師の指示のもと、退院当日に酸素吸入・尿道カテーテル・胃管カテーテルを抜去、持続点滴のみ継続し帰って来られた。

(具体的な取り組み)
職員間で「M様らしさ、M様らしく生きる為にはどうすればよいか」を話し合い、入院前と同じように職員、利用者、家族と関わりながら普段と変わらない生活の中で過ごしていただき、日常生活をサポートする事とし、無理をせずM様のペースで、M様の思いに寄り添う事を最優先に考えた。皆と同じ空間で過ごす中、周りが食べている様子や食べ物を目で追う素振りが目に留まり「食べたいのでは?」と感じ、食べることを試みたいと思った。危険を充分理解したうえで「母が食べたいのであれば食べさせてあげたい。」とのあきらめ切れない家族の強い思いもあり、協力病院医師の協力のもと、入院中は絶食であった為、ゼリー状の物を口に含む事から始めた。1口2

口と徐々に食べる意欲が増してきた事から、本格的に経口摂取に取り組む事にした。M様の体調、食欲、飲み込みの状態に合わせ、食事形態もペースト状→ミンチ状→キザミ状へと柔軟に変更し、水分はお茶やジュース等をゼリー状にして食べていただいた。

(活動の成果と評価)
医師は「経口摂取できない」家族は「PEGはしない」と言われ、私達職員は食べる事ができず衰弱していくM様を見ていく事しかできないのかと悲しみと不安で一杯になった。しかし、帰って来られたM様の表情や家族の思いから「M様ならできるかもしれない。」と可能性を信じる事ができた。喜怒哀楽の表情が戻り、目を合わせての会話が増える中、食事に手を伸ばされる、1人で立ち上がる事は難しいがご自分でお尻を動かせる良い位置へ直される等、積極的な姿が見られるようになった。現在では、柔らかい料理なら刻む事なくそのまま食べられている。食事が食べられる事で体力も増し、手引き歩行の距離も長くなる等、M様の底力を知る事ができた。又、短時間ではあるが自宅に帰り家族と過ごす事ができ、終末を覚悟されていた家族の「こんなに元気になって」と涙を浮かべ喜んでくださる顔を見ることが出来た。

(考察・まとめ)
親の家という住み慣れた場所に帰り、馴染みの人達と一緒に何気ない会話や五感に働きかける生活の匂いや音、その自然な生活の流れの中で過ごしていただく事によってM様らしさを取り戻され、何かをする意欲や食べる意欲に繋がったのではないかと思われる。認知症の方にとっての1年は身体的にも精神的にも変化が大きくその時その時が大切であり「その人らしく生きる」為、私達は何をお手伝いすればよいかを常に考えている。そして1番大切な事は、認知症だからターミナルだからと特別視せず、私達と同じ人としてあたりまえの生活を送り、その中で発する思いをしっかり受け止め、その人の可能性を信じ、あきらめず「持っている力」を引き出す

事だと再認識できた。